

# ゲオルク・ジンメルの個人と社会

東京大学大学院 高橋幸

## 1 目的

ジンメルのキーワードは、レベルの異なるいくつかの意味を含みこんでいる。「相互作用」や「形式」がそうだ。この特徴はジンメルに彼一流の社会記述力をもたらしもするが、同時に、ジンメルの社会記述を社会学理論として分析・再構築しようとする者を阻みもする。

本稿は「形式」の問題を扱う系の一部である。形式社会学という方法論をジンメル自身はどのように実際使っていたのかという観点から考察することで、形式社会学の意味の一端を明らかにしていくことが目的である。(I) 社会を個人との対概念として形式的に立てることは、(II) 形式社会学というコンセプトにそくしたものとして位置づけることができる、というのが見通しであるが、紙幅の関係上、今回は (I) のみを報告する。

## 2 議論の内容と結論

ジンメルにおいて、社会は諸個人の相互作用として成立し、個人は社会圏の交差点に成立する。社会は個人をその構成要素とし、個人は社会的なものをその構成要素とするという対称性が成り立っており、どちらも相手によって自らの内容を満たしている。それにもかかわらず、社会は個人に還元されないし、個人は社会的なものに包摂され尽くしてしまうこともない。その根本的な理由をジンメルの思想内に探るならば、個人と社会を実質的内容によって区別しているのではなく、「個人と社会は不可避的に対立するものである」という形式的規定によって、個人と社会の双方を定立させているからではないかということが見えてくる。

ジンメルが初期にも後期にも論じた「社会的水準」(『分化論』(1890)第4章、『根本問題』(1917)第2章)にその具体例が見いだせる。ジンメルはここで、個人が社交圏に入った途端に、自らの「個人的水準」を引き下げるという奇妙なふるまいの説明をつけるために「社会的水準」を持ち出している。「社会的水準」を実体的・内容的に語ることを避けようとしていることが見てとれる。なぜ社会は個人との「対」というあり方をするのかを探るには、『社会学』(1908)第1章補説「いかにして社会は可能か」におけるアプリオリ2を検討するのがよい。そこでは、「個人は社会の外部と同時に内部にもある存在である」という判断形式が述べられている。この命題を脱パラドックス化して解釈していくと、第一義的には個人の心的現象とされるジンメルの社会は、定義上「個人の心理内における個人的なもの」と対立するとされていることがわかる。これらを総合するように現れるのが『根本概念』(1917)第4章における、「個人と社会は不可避的に対立する」という定式である。よくよく考えてみれば、ジンメルの論じている「社会」の中には、必ずしも個人と対立しないものもある。例えば、社会分化と個人の個性化は双方手を取り合って進展するとされていた(『分化論』第3章「集団の拡大と個性の発達」)。それにもかかわらず、最期となった社会学的著作では、個人と社会の対立を不可避なものとして規定している。これはたんなるジンメルのペシミズムではない。社会を内容によらず形式的に定立するための方法だったのであり、これがジンメル形式社会学の理論的基盤をなしている、というのが本稿の主張である。

## 文献

- Simmel, Georg [1890]1989, *Über social Differenzierung: Sociologische und Psychologische Untersuchungen*, Frankfurt am Mein: Suhrkamp Verlag.(=[1970]1973, 日高六郎他訳『現代社会学大系 第1巻 社会分化論 社会学』青木書店。)
- [1908]1992, *Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, Frankfurt am Mein: Suhrkamp Verlag.(=1994, 居安正訳『社会学』白水社。)
- [1917]1999, *Grundfragen der Soziologie: Individuum und Gesellschaft*, Frankfurt am Mein: Suhrkamp Verlag.(=2004, 居安正訳『社会学の根本問題: 個人と社会』世界思想社。)